

古代世界研究会

かいほう

2006年8月22日発行
古代世界研究会 No.89

事務局：〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町1-33
千葉大学教育学部
田村孝研究室内

2005年秋、英米圏の研究者による講演続く

佐藤 昇（学振特別研究員PD）

2005年10月後半、東大の銀杏並木こそまだ青々としたままでいるものの、漸く朝晩に秋らしさを感じずにはいられなくなった頃、我々古代史研究者は、数々の外国人研究者を迎えることになった。

10月19日水曜日、ノース・キャロライナ North Carolina at Chapel Hill 大学歴史学科教授リチャード・タルバート Richard Talbert 氏によるセミナーが東京大学文学部3号館西洋古典学研究室で行われた。氏は、現在最も信頼度の高い古代史地図 *Barrington Atlas of the Greek and Roman World* の編者であり、今回は 'What is the "Peutingner Table"?' と題し、ポイティンガー地図についての講演を行った。同地図が如何なる構想に従って制作されたのか、作者の意図など、想像力豊かに、生き活きとした物語を披露してくれた。地図編纂者としての経験もその想像を語る言葉に、具体性と、そして情熱とを添えた。参加者からのやや冷静な質疑にも、その何倍もの熱っぽさで切々と自説を展開していた姿が印象的であった（翌日は慶応大学に於いて *Barrington Atlas* 編纂に関する講演を行ったということであるが、筆者は不参加）。

10月25日火曜日、ケンブリッジ Cambridge 大学古典学部ギリシア史学教授ポール・カートリッジ Paul Cartledge 氏による講演 'Spartan Ways of Death' が、やや真新しい東京大学法文1号館101号教室に於いて行われた。氏はスパルタ史研究の第一人者として高名であり、また英国BBC放送を通じて広く研究者以外への古代史普及にも携わっている（日本では専

門家以外の方々には、やはり啓蒙書である邦訳『古代ギリシア人—自己と他者の肖像』（橋場弦訳、白水社2001年）の著者として知られているかもしれない）。今回の講演は、スパルタにおける葬制の在り方、死に対する態度を社会の在り方と関連づけて考察したものであり、恐らく、（文化的にも氏とは異なる日本人の）参加者に意見を問うことも、少なからず氏の意図するところであっただろう。期待通りか否かは兎も角も、質疑応答は活発に行われた。Cartledge 氏も、他の研究者同様、話術に優れ、機知に富み、あるいは他の研究者以上に、聴衆を意識し、時折教師が若い学生を前に教室で口にするような駄洒落を差し挟むことも忘れなかった（残念ながら、氏とは文化的にも異なり、また年代も幅広い聴衆を前に、その目論見は不首尾に終わった部分もあったのだが）。その後、氏は短期間の東京滞在中に下町、浅草などを観光し、大阪での講演に向かった。紳士的立ち居振る舞いでありながら、東京駅で新幹線を待つ間も駄洒落を忘れないところは、英国紳士ならでは、というところであろうか（大阪では、前年に出版された氏の著書を元に、'Alexander the Great: the Hunt for a New Past' という講演を行った）。

11月1日火曜日、スタンフォード Stanford 大学古典学部古典学教授ウァルター・シャイデル Walter Scheidel 氏及び同助教授 associate professor ジョセフ・マニング Joseph Manning 氏による講演が東京大学法文1号館101号室に於いて行われた。Scheidel 氏は、ローマ社会経済史を中心に研究論文、著書を公刊しており、今

回は‘The Nature of Money in Ancient Rome and China’と題し、氏が現在携わっているプロジェクトの一環として、地中海文化圏と中国における貨幣文化の相違を、使用する金属に着目して検討するものであった。Manning氏は、プトレマイオス朝エジプトの社会経済史を専門としており、日本ではエジプトのアコリス発掘調査隊の一員としてご存知の方もおられるかもしれない。この日の講演では、‘State Formation and Development in Ptolemaic Egypt: An Institutional Approach’と題し、自らの専門領域の研究の方向性について、ギリシア語やデモティックで書かれたパピルスの研究、考古学的調査、諸分野の協力の下に実り豊かな研究たり得ることを主張した。講演会の開催がやや性急に話が決まったこともあり、参加者の少なさも懸念されたが、比較的若い世代の研究者が多く参加し、それなりの意見交換もできたように思われた。

11月の第1、2週には、東京大学法文1号館に於いて、5回にわたり、London大学UCL歴史学科名誉教授ジョン・ノースJohn North氏による連続講演が行われた。これは東京大学の死生学構築COEプロジェクトの一環として行われたものである。表題はそれぞれ‘Priests and Law in Republican Rome’、‘Cicero and Republican Divination’、‘Caesar and Lupercalia of 44BC’、‘The Underground Basilica at the Porta Maggiore’（この回のみ都合により筆者不参加）、‘Choice Chance and Change in the History of Pagan Religion’である。氏はローマ宗教史を専門とし、先頃退職した、言わば「大御所」であるが、少なくとも筆者が参加した各回の報告は、それぞれ少なからず刺激的な意見を含むものであった。最終回は全体の総括と、新潟大学法学部教授葛西康德氏とソフィア大学PhD イスカラ・ゲンチェヴァ=ミカミIskra Gencheva-Mikami氏によるコメントが添えられ、議論に広がりを与えた。彼もまた聴衆に程よく配慮し、そのパーフォーマティブな話しぶりから、普段の茶目っ気のある「かわいらしいおじいさんぶり」も滲み出ていた（個人的には、滞英時にお世話にもなっていたため、私的に話もしたかったが、他事に忙殺さ

れ、叶わなかった)。毎回講演後に、研究者以外の参加者を想定してのことであろう、日本語による要旨が読み上げられた。主催側の配慮、苦労は重々承知の上で、敢えて苦言を呈させていただくとすれば、要旨の配布は兎も角も、読み上げは、その後の質疑応答の時間を著しく削ってしまった。それが故には分からぬが、学生や研究者以外の参加者が自由に質問する、といった光景はついぞ見られなかったのは、North氏にとっても残念なことであっただろう。

11月後半には、ダーラムDurham大学古典学部前古代史教授、現名誉教授ピーター・ローズPeter J. Rhodes氏による、講演及びセミナーが行われた。氏は長年英国、並びに世界の古代ギリシア史を牽引してきた泰斗であり、殊に古典期アテナイの制度史及び政治史では研究史に欠かすことのできない人物である。今回は11月初旬から日本に滞在し、大阪、京都、名古屋、東京でそれぞれ講演やセミナーを行った。筆者は滞英時に私的に交流もし、そしてまたロドス島で開催された彼の退官(65歳の誕生日)を記念した国際碑文学会にも参加したことなどもあって、名古屋での講演からつきあうことになった。11月15日、名古屋大学文学研究科1階大会議室に於いて、‘The Reforms and Laws of Solon: An Optimistic View’と題して、ソローンの実像に迫り着く可能性について講演を行った。古代史研究者以外の参加者にも配慮し、部分ごとに名古屋大学教授周藤芳幸氏(西洋史学)が簡潔にして的確な要約を行った。質疑応答では、名古屋大学の学生たちがそれぞれ懸命に質問しており、Rhodes氏も喜んでいた。翌16日、名古屋大学文学研究科3階演習室で大学院演習が行われた。古代ギリシア史を専門とする大学院生3名が、それぞれの研究の経過を英語で口頭報告し、これに氏がコメントを加えた(彼が帰英した後、報告者のそれぞれが丁寧な助言と温かい激励のメールを受け取ったということである)。11月21日月曜日、千葉商科大学図書館L1会議室で‘How to Study Athenian Democracy’と題した講演が行われた。これは、氏の近著‘Athenian Democracy and Modern Ideology’を

元にした講演で、当初より、古代史以外の一般の聴衆を想定して行われるものと宣伝されていたが、実際には参加者の多くが古代史研究者であったことは、彼も想定外であっただろうし、実際に古代史研究者ではなくして参加した方も些か居心地がよくなかったかもしれない。尚、同内容の講演は大阪でも行われた。23日水曜日、東京大学山上会館に於いて‘“Classical” and “Hellenistic” in Athenian History’ と題する講演を行った。ヘレニズム期アテナイを取り上げ、対外的政治姿勢及び政治制度、運用に関して認められる、連続と断絶について考察した。25日金曜日には、東京大学西洋史学研究室別室に於いて‘Democracy and its Opponents in Fourth Century Athens’ と題するセミナーを行った。冒頭に氏の要約があった後、同研究室に在籍する（またはしていた）古代史専攻の（現役及び元）大学院生たちが、それぞれの疑問点などを次々に質問し、氏がこれに一つ一つ慎重に（しかし時に、ある程度割り切って）応じた。数時間にわたって間断なく質疑応答が展開され、さぞかし疲労困憊されたことと思ひ、散会としたところ、ニヤリと笑みを浮かべつつ、いやいやまだまだ、と応じた壮健さには、些か驚いた。翌26日土曜日、東京大学山上会館に於いて‘Aristophanes and His World’ と題し、作品から喜劇詩人の姿勢を探る可能性と同時代の制度を知る手掛かりとしての価値につい

て、講演を行った（同内容のものは京都大学においても行われた）。これには、古代史研究者のみならず、広義の西洋古典研究者が集った。氏は、滞在期間中、講演した都市以外にも、奈良、伊勢、鎌倉、日光などを観光で巡り、筆者も一部随行した。何より驚いたことに、彼は、旅程に空白があるとなると、一人で自由に、そして広範に行動していた。東京の地下鉄すら、十分に乗りこなしていた。変わらぬ誠実さと、いたずらっぽく輝かせた眼差しに日本で再び会えたことは幸いであった。

この他にも幾つか外国人研究者の来日講演が行われたが、ここでは私が参加、関係したもののみを記した。今回の一連の英米圏の古代史研究者来日は、得難い機会であったと同時に、受入れや手配などの諸々に関わったあらゆる人々に、相当の負担がかかったであろうこともゆめゆめ忘れてはならない。同時期に、通常の業務、研究はもちろんのこと、史学会大会を初めとして、その他、大小様々な会合が行われていたことを勘案するに、途方もない労であったに相違ない。

気がつくとも東大の銀杏並木は、すっかり黄葉し、冴え渡る青空を背景に、陽光を受けて黄色い輝きを放っている。舞い落ちる落ち葉が、邪魔者扱いされることなく、しっかりと養分になるように、我々もこの経験を、次への糧とせねばなるまい。

(2005年12月12日脱稿)

【サマーセミナーと総会のお知らせ】

今年度のサマーセミナーは、メールあるいは郵送ですすでにお知らせしているとおおり、来年の日韓中シンポのプレ・シンポとして 9月23～24日 に 明治大学駿河台校舎研究棟第一会議室（昨年と会場が異なります）で開催されます。どうぞふるってご参加下さい。また、同時に本研究会総会も開催されます。会費改定の提案も予定されておりますので、こちらの方もどうぞ宜しくご参集下さい。